

## 郡上の植疱瘡

森永 正文

(医)成医会 もりなが耳鼻咽喉科

江戸時代、美濃郡上地方の各地でも疱瘡の大流行が繰り返されたようで種々の記録が残されている。天保六年十月、八幡新町の商家の息子、鉦吉という六歳の男の子が疱瘡に罹患した。二日の夜に発熱、四日には解熱。その日の夜より疱瘡が出現し初め、顔に13カ所、体全体に約130-140カ所程度みられるものの非常に軽く、命に別状は無く家族一同は大安堵した。これは金神力に願をかけたおかげだと神のご加護に心から感謝し、見舞客の人々などに赤飯を配り全快の内祝いとしたという。鉦吉の生家にはこの時の見舞客控帳が残されている。見舞客は172人にも及び、武家、町人、近郷有力者など多種多岐にわたり、中には数名の町医の名前も見られる。見舞いの品々として菓子、落雁、江戸絵などが贈られている。この14年後に、疱瘡の大流行に歯止めをかける画期的な予防法がヨーロッパから伝来した。飛騨中呂の大前家文書(「飛騨の疱瘡史」)によれば郡上八幡の町医富岡玄三が嘉永三年(1850)八月頃南飛騨地方で種痘を行っていたという史実がうかがえ、郡上でも1850年以前に種痘が開始されたことが示唆される。郡上藩医浅井政時は美濃大垣江馬蘭齊の門人であり、信州熊谷珪碩の例を考えると蘭齊より郡上藩医を仲介として分苗され、1850年頃より郡上での種痘が開始されたものと推論される。安政四年、牧村妙見垣内で疱瘡が流行し多くの患者、死者を出したが、植疱瘡の施してあった子供だけは疱瘡を免れた(『もっともその外に五助の子一人うへ疱瘡いたし有り、これは煩い申さず候、この後はいずれもうへ疱瘡仕るべき事也』(「万留帳」))。これにより植疱瘡の希望者が増加し、郡上の各地に種痘が拡がっていった。同帳には、安政六年、中切村医師野村貞石が妙見垣内の子供に植疱瘡を行った模様も記述されている。種痘普及要請の太政官布告を受け、明治三年六月から藩医を中心とする郡上藩医学校医師により郡上藩医学所での種痘が始められたが、開始に先立って触出された御触書には『当管内は是迄も少しは行わるる之有るは、言込も之無く』とあり、開始前でのある程度の種痘の普及が推察される。開始後種痘の反対運動がみられたものの種痘事業は進み、領内でも遠方地域からの受痘率が低かったのか、城下三里以上離れた地域では九月以降は各地域の在方医師に委ねられた。藩営種痘は、明治四年十一月に医学校が廃校になるまで続けられた。同年、種痘医免許制度が開始され、郡上各地の医師が種痘医として種痘証に散見される。同九年の「天然痘予防規則」に基づき種痘医を中心に種痘活動が全国的に広い範囲で行われるようになり、1980年5月8日、痘瘡終焉の時(WHO「痘瘡根絶宣言」)を迎えるのである。

以上より、1) 鉦吉のエピソードは、当時の人々が疱瘡というものを如何に恐れ、それだけにその病を克服できた時の喜びはひとしおであったかがうかがえる。200人近い見舞客数は、八幡の「旦那衆」の一つ、齊藤家ならでもとも言えるが、この病気に対する関心の高さを物語るものでもある。2) 交通至便とは言い難い奥美濃地方にあっても日本への種痘伝播の比較的早い時期に種痘が開始されている。3) 種痘開始の間もない時期に一人の施痘児だけが罹患を免れたことにより、その村落を含め郡上での種痘が急速に広まった。4) 郡上への種痘の伝播、普及には、藩医が大きな役割を果たしている。と考察される。なす術もなくあれほど恐れおのんでいた疱瘡という病を種痘という良法の移入により乗り越えていく、郡上という小地方における人々の疱瘡との戦いの歴史を通して、一つの難病をも克服してしまう人間のもつ叡智というもの的一端を垣間見る思いがする。

美濃郡上地方における疱瘡の小史につき若干の文献的考察を含め報告する。